
ネギまでオルスにわび続けるストレイボウーッ！

ぞなむす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまでオルスにわび続けるストレイボウツ！

【Nコード】

N 6 1 3 6 Y

【作者名】

ぞなむす

【あらすじ】

心のダンジョンに囚われていたストレイボウの魂。魔王が7人の勇者によって倒され、その魂はあの世に行くはずだった。しかし、彼は何故か生きていた。それも全く知らないところで……

1 一応「L I V E A L I V E」を知らない人のために簡易説明を用意しております。

2 このSSの主人公はストレイボウです。ギャグテイストをお望みの方、ストレイボウは小悪党でなければ嫌だという方、ストレイボウが憎くてオディオになってしまいそうな方、その他登場人物

をなじらずにはいられない方はバックされることを推奨します。

LIVEALIVEって何？ストレイボウって誰？という人のために（前書き）

ネタバレを含みます。また、これはあくまでも簡易説明です。簡略化のしすぎで色々誤解を生んでしまうかもしれませんので、なるべくwikiや攻略サイトなどをご覧ください。

LIVE ALIVEって何？ストレイボウって誰？という人のために

LIVE ALIVE：ライブアライブ。略称LAL。通称あの世で俺にわび続けるRPG。

1994年に発売されたRPGで、オムニバス形式を取っていた。初期状態で7つの時代のシナリオを選択することが出来、全てをクリアすると中世編、そして最終編へと続いていく。システムは普通のRPGだが、戦闘システムは当時としては斬新な「チェッカーバトル」システム（戦略シミュレーションのようなもの）を採用していた。しかしそのシステムは当時の消費者には受け入れられず、他の名作の影に隠れてしまった『隠れた良作』である。

ストレイボウ：LIVE ALIVEの中世編に登場する人物。主人公であるオルステッドのライバルとして登場する。オルステッドの親友であったが、戦いの才能では彼に及ばず劣等感を抱いていた。そしてルクレチア王国の王女が魔王に攫われ救出に向った時、彼はオルステッドを見返す機会を得て親友を裏切り、陥れた。それでもオルステッドはくじけず、王女を救いに来た。オルステッドを絶望させる計画を歪められてしまった彼は、今まで溜めてきた憎悪をオルステッドに叩きつけ、最後にこう言い放った。

「あの世で俺にわび続けるオルステッドーッ！」

そしてかつての親友との決闘が始まり、彼は敗北。その生涯の幕を閉じた。そしてオルステッドは、親友にも、そして自分を信じると言った王女にも裏切られ、人を憎み魔王オディオとなった。

死後、魂となった彼は魔王オディオが滅びたルクレチアに造りだした心のダンジョンに囚われ、オルステッドが魔王になったのは自分のせいなのかと反省の色を見せていた。

LIVEALIVEって何？ストレイボウって誰？という人のために（後書き）

念押ししますが、あくまで簡易説明です。

LIVE（前書き）

小説中『憎しみ（オディオ）』等の表記が出てきますが、それらは普通に『オディオ』と読んでください。

L I V E

彼は後悔していた。

（……俺の……せいなのか）

心のダンジョンの中で、ずっと。

（あいつが……こんなになってしまったのは）

そこから彼の魂が解き放たれてからも、ずっと、ずっと。

「ネギまでオルスにわび続けるストレイボウ……」

「うっ……」

やわらかな風が頬を撫でる感触で、彼は目を覚ました。

「ここは……？」

いまだぼやけている意識を頭を振って覚まし、辺りを見回す。

辺りは夜の暗闇に包まれており、月の優しい光に照らされていた。しかしそれも彼の周囲に限ったことで、彼の眼下、広がる景色にはぼつぼつと小さな光が見える。

そして、何よりも彼の目を引きつけたのは、先程まで彼がもたれかかっていた巨大な樹の存在であった。

およそこの世のものとは思えないその大樹は、宵闇に飲み込まれまいとするように淡い光を放っていた。

それは幻想的な光景であった。あまりの美しさに彼はしばらく呆けていたが、はっと我に返った。

「これは……」

その場に立ち上がった彼、ストレイボウが大樹に手を触れる。すると、それに呼応するかのように大樹の光はその強さを増した。

魔法使いとしての最高峰に位置する彼には、その光の正体がわかる。

魔力。

膨大な、しかし暖かなそれが、大樹から光となってあふれているのだ。

「一体何なんだ……？」

自分は、死んだのではなかったのか？

かつての親友であつたオルステッドに敗れて。そして死した後も、魔王となつた親友が造り出した心のダンジョンに魂が囚われていたはずだ。

しかし、魔王が敗れると同時に心のダンジョンも崩壊したのではなかったのか？

だというのに、俺はどうしてまだ生きているのだ？

「それとも、ここが死後の世界だというのか？」

ここを死後の世界というには、どうにも生の輝きが満ちすぎてはいないか？

「オルステッド……」

自分は、地獄に堕ちるべき人間だというのに。

友を裏切り、魔王を生み出し、国を滅ぼしてしまった自分が。どうあがいても地獄とは呼べないこんな場所に、どうして辿り着いてしまったのだろうか。

「オルステッドオ……………！！」

彼は気が付くと、大樹に縋りついていた。

謝りたかつた。自分のせいで、全てが狂ってしまったのだ。ルクレシアの民に、国王に、ハッシュに、ウラヌスに、アリシアに。そして、オルステッドに。全てに謝りたかつた。

自分がオルステッドを妬まなければ、憎しみ（オディオ）にさえ囚われなければ。あんなことには、ならなかつたというのに。

しかし、そんな機会は訪れないとは思っていた。全てを狂わせた自分は地獄の底に堕ちる。しかし、他の人間はそこまでの業を背負つてはいないだろう。だから自分はあの世で、誰も聞かない謝罪を

し続けなければならないと思っていた。

唯一、機会があるとすれば、オルステッドだった。

一番謝りたい存在。彼が造り出した心のダンジョンでは、決して声は届かなかったが。自分のせいとはいえ魔王となり、多くの人を殺めた彼ならば。自分と同じ地獄の底まで来てくれるのではないかと、そう思っていた。

そこで、地獄の責め苦に耐えながら、たとえ許してもらえないとしても、わび続けようと、心のダンジョンの中で思っていたのに。何故、自分はこんなところにいるのだろうか。

「う、うう………！！」

何故、何故。自分は、オルステッドにわび続けることさえ、許されないというのか。自分は、そこまで罪深いのか。

生前の彼を知るものであれば、この光景に誰もが目を疑うだろう。あのプライドの塊のようであつた男が、衆目を気にすることなく涙を流しているのだから。

全てを包み込むような大樹に縋りつき、ただただ涙を流す彼はしかし、

「お前が侵入者だな？」

幼い少女の声によって現実へと引き戻された。

L I V E (後書き)

続くかどうかは未定です。要望があれば続ける可能性が上がります。

死望（前書き）

『 内の魔法はちゃんと詠唱しています。』

死望

「……………」

ストレイボウに声をかけた少女、エヴァンジェリンはわずかに戸惑っていた。

今日は普段なら警備の仕事も休みで、学園長の部屋で暮でも打って過ごそうかと思っていたし、実際そうしていた。しかし、世界樹前に突然侵入者が現れ、学園長にその対応を任されたのだ。

本来なら力を封印されているエヴァンジェリンが出るよりも、学園長本人が打って出る方が安全で直ぐに片が付く。だが、今は修学旅行中ということもあって旅行中の面々のバックアップとして待機せねばならず、動くことが出来なかった。

そこで本来なら休みである、言い換えれば余剰戦力であるエヴァンジェリンにお鉢が回ってきたというわけだ。

そういった訳で、渋々ながら世界樹前に来たのだが。

（……………なんだコイツは？）

世界樹が時期でもないのに発光しているのも気になったが、それ以上の変化が見られないことから今は無視しても構わないだろう。

しかし、肝心の侵入者の様子がおかしかった。侵入者であろうその男は、エヴァンジェリンの目にはただ大樹に縋りついて泣いているようにしか見えなかった。

（おい、茶々丸。本当にコイツであってるとるんだろうな？）

（はい、マスター。私のセンサーが感知した魔力とこの人の魔力は合致しています）

茶々丸が言うからにはそうなのだろう。茶々丸は超のハイテクで造られた機械なのだから、万に一つも間違いはないはずだ。

依然訝しげな瞳を向けながら、エヴァンジェリンは毒々しい液体の入ったフラスコを構えた。

「言え。貴様の目的はなんだ？」

「……………」

「チツ、だんまりか」

侵入者の目的は分からなかったが、とりあえず排除すればいいだろう。そう考えたエヴァンジェリンは、ストレイボウにフラスコを投げつけた。

「『魔法の射手 連弾・氷の3矢』」

空中で割れたフラスコの中身が混ざり、それが氷の矢となってストレイボウに襲いかかる。

それに彼はわずかに目を見開き、しかし。

何の抵抗も見せないまま、その矢を受けた。

3本の矢はそれぞれ軽い音を立てて右肩、左ひざ、そして腹部を貫いた。

初歩の初歩といえる魔法といえど、何の抵抗もなければ人の体を貫くのは容易かった。

その様を見て逆に慌てたのはエヴァンジェリンである。

彼女としてはほんの威嚇射撃程度の気持ちで放った魔法だった。

それを防ぐどころか、回避する様子すらも見せずその身に受けたのだ。

麻帆良の魔法関係者は、学園長からやむを得ない場合を除き不殺を命じられている。それは学園の魔法使い達の正義が殺生をよしとしないからだ。

学園長としては、死体の処理が面倒、情報を聞き出せる、取引に使える等といった黒い事情も存在するのだが。とにかく、殺しはご法度だ。

また、エヴァンジェリンの学園内での立場は非常に危ういものであり、警備員として働くことで学園内の正義の魔法使いから見逃してもらっている状況なのだ。

それが、たとえ侵入者といえど、抵抗されないままに殺してしま
ったとなればどうなるか。

（クソッ！）

内心で毒づきながら、エヴァンジェリンは倒れ伏したストレイボ
ウに慌てて駆け寄った。そして、彼女はそこで初めてその青年の瞳
を直視した。

（……………ああ）

彼女は、その目を知っていた。

（何かに絶望した人間の、目だ）

深く、深い。暗く、暗い。闇色と称してもいいその瞳が、エヴァ
ンジェリンを映していた。

それを見て、彼女は納得した。青年が攻撃を防がなかったのは、
死を渴望しているからだ。今までにも、そういった人間には山ほ
ど出会ってきたから。

人は生きたいと思い、願うから死の危険から身を遠ざけようとす
る。いや、よしんば生きたいと願わなくても、生存本能が死を退け
ようとするとだろう。

それがなされ得ないのは。本能をも上回る、死への欲求がその身
にある時だけだ。

エヴァンジェリンが青年の体を起こす。彼はどうやら気を失って
いるらしく、体の力が抜けていた。

こんな人間が、どういった理由でこんな場所にいるのか。

何はともあれ、この青年を死なせる訳にはいかない。それに詳し
く事情を聴く必要もありそうだ。

ああ、面倒なことだと彼女は一つため息をつき、

「茶々丸、コイツを背負ってこい。学園長室に戻るぞ」

「はい、マスター」

くるりと踵を返し青年を背負った茶々丸と共にもと来た道を引き
返していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6136y/>

ネギまでオルスにわび続けるストレイボウーッ！

2011年11月25日02時55分発行